

## 雑草のごとく



愛 知 県

主 婦 栗 木 宏 美

病院や、福祉施設、養護学校などに行くと、こんなにも多くの人が、いろいろな病と戦っているのか、私も負けてはいけない、がんばらなくては、と心がひきしまる。

しかし、いざ、街並をあるいていると、みんな「健常者」という仮面をつけ、そ知らぬ顔をしている。だから、みんなの視線は、私に集中する。視力の低い人もいるだろうに、ものすごくブスな人もいるだろうに、心の汚れた人もいるだろうに。体の障害だけは、どうやって仮面のかぶりようがないから仕方がない。何か変わったものがあれば、人の視線は、そっちに動くのは、当然の事、だから、いちいち人の視線を気にしていたら、何も出来やしない。

以前、「美人は、三日であきるが、ブスは三日で慣れる」などという皮肉なことわざがあった。見慣れるという事は、大切な事だと思う。私は、あえて人の波の中へ入っていくようにしている。背の高い人もいれば低い人もいる。鼻の高い人がいれば低い人もいる。それと同じように、耳の不自由な人もいれば、手足の不自由な人もいる。そんなふうには、すべての人が考える事が出来るようになったなら素敵だと思う。

私は、生まれつきの脳性小児麻痺で、四肢と言語に障害を持っている。四つ下の妹は、重度の精神薄弱である。そのため両親は、私だけでも、普通の子と同じように育てたいという強い意志と期待があったよ  
うで、かなり厳しく育てられた。もちろん、幼稚園も小学校も中学校もすべて近所の子と同じ所へ通った。  
いじめられるのは、朝めし前。

「おばけ、おばけ」

と、がき大将達が私の歩き方をまねして、私の回りをとり囲む。

「何をしゃべってるかわからない。もっときれいなかっこう出来ないの」

「いやね。きたない」

髪の毛の長いお嬢様ぶった女の子達のグループが悪口の連発。

「なにくそ、負けてなるものか。泣いたら負けだから、絶対に泣いてなんかやるもんか」といつも心の中で思い、

「うるさい、バカ、あんたは口がでっかいくせに」

「好きで、こんなかつこうしてるわけじゃないんだからね」

と、言われれば、言い返した。でも、言語障害のある私には、所詮、口では勝てなかった。どうにも、私の怒りがおさまらない時は、いじめっ子のくつを、こっそり隠したり、消しゴムをゴミ箱の中に捨ててしまったり、そんな悪い仕返しをした。ひどいいじめにも耐えていけたのは、踏まれても踏まれても、はえてくる雑草のような、しぶとい私の性格と、必ず味方になってくれた、心優しい友達のおかげである。

それと、もう一つ。私にはピアノが弾けるといふ特技があったので、その点では、みんなに一目おかれていた。当時は、クラスでもピアノが弾ける子は、一人か二人いればよいとこで、けっこう鼻の高い存在だった。特に右手の悪い私は、どうしても悪い方の手は使わない。使わなければ動かなくなってしまう。なんとか、楽しみながら手を動かす方法はないだろうか、両親が私に四歳の頃から、ピアノを習わせてくれた。しかし、それも、おいそれとは、簡単にことは運ばなかった。今でこそ、女の子がピアノを習うのは当たり前前の時代であるが、その頃は、お金持ちのお嬢様の習いごとであった。まして障害者に教えてくれるような、理解ある指導者は少なかった。そのため、随分遠くまで、レッスンに通った。母は、幼い妹を背負い、私を自転車の後に乗せ、片道四十分もかかる道程を、毎週毎週こぎ続けてくれた。本当に、雨の日も風の日も、一日も休む事なく。

父は、仕事から帰ると、必ず私を裏の公園に連れて行き、鉄棒やら、ジャングルジム、マラソンと、いろいろ運動をさせた。そして日曜日には、近くのデパートに行き、一階から十階までの階段を、一歩一歩登りつめた。やっとなつた屋上で、食べたアイスクリームの味は今でも忘れない。子どもながらに、私

の根性も相当のものであったと思うが、両親の忍耐強さ、厳しくも暖かい私への愛情は、とてつもなく大きかったにちがいない。今二人の子の母親となり、初めて身にしみる思いで、頭が下がる。

やがて、進学、就職と新たな試練にぶつかる。私もただがむしゃらに一生懸命生きてきた少女時代を過ぎ、だんだん容姿が気になる年頃になった。

「世の中、すべて美しいものに目がいつて、美しいものだけが救われるんだわ。こんな私が、一生懸命、生きてたって何の得になるの。結局つかれるだけじゃない。この体の障害のために、次々と夢がこわされていく」

そんな、投げやりな気持ちになって、ひどく落ち込んだり、泣きわめいたりした。時には親友さえも、にくらしく、ねたましく感じた。

「頭も良い、顔だってかわいい。こんな私にもひどく優しい。神様は、なんと不公平なの。傷の一つもつくといいいんだわ」

などと、おそろしい考えが、頭の中をよぎった。

そんな、私の堅くゆがんだ心が、少しずつ解けていったのは、カトリック系の高校に入学し、心清いシスター達との出会いからである。週一度、宗教の時間があり、聖書や奉仕などについての勉強をした。こっそり机の下で、試験勉強をしている者も多かったが（私も時には、その中の一人だった）時々、ズキッと心に突き刺さる言葉がある。その中の一つに「愛される事よりも愛する事を」という言葉があった。

「愛されたいと思う時は、美しく着飾ったり化粧をしたりと、とかく上辺の事にとらわれがちであるけれど、本当に自分の愛する人には、何でもしてあげたいと思うし、自分の身を投げうってよいと思う。それは、その人を愛しているからであって、決して愛されたいからそうするのではない。親が子どもに対する愛も同じである。愛されたいと思う前に一生懸命、愛しなさい。そうすれば、きっといつかみんなから愛されますよ」

こんなシスターの話は、醜い体が心までも食い荒らして、ぬけがらになりそうな私に、ストップをかけてくれた。

その後私は、名古屋にある仏教系の大学（社会福祉学部）へ進学した。聖歌で卒業し、合掌で入学、なんと奇妙なものだった。不思議なもので、公立学校は、あまり障害者を好まないらしく、私の知るところによる障害のある友人達も、ほとんどが、宗教系の学校に入っていた。よく公共施設が出来ない、社会福祉の穴埋めを宗教団体がやっているという話を聞くが、これも一つのよい例ではないだろうか。

大学に入学し、私は親元である浜松を離れ、初めて一人暮らしをした。多くの期待や夢、その反対に不安をかかえる中で、自分の歩こうとしている道は、昔からひかれているレールの上ではないだろうか、とふにおちない気持ちになった。確かに頭もよくないが、他にやりたい事もいろいろあった。自分なりに描く将来の夢もあった。しかし、結局、自分に残された道はこれしかないのだろうかとため息が出た。しかし、新しい友人が次々と出来ていく中で本当にこの道があってよかったと思えるようになった。私達は、

四年間、福祉六法や社会保障などのぶ厚い本をかかえて学校に通ったが、その内容と云えば、ほとんどと言っているほど、頭の中には無い。ただ一つ、焼きついている言葉は、

「愛と共感」

たった四文字の簡単な言葉。でも、それが人間として一番必要なものであり、最もむずかしい事である。「社会福祉なんて、バカにならなきゃ、やってられないわよ」

などと、よく一人でぼやいていた。しかし、本当に、心からバカになれる仲間達と数多く出会えた時、私の道はまちがいでなかった、この道が残っていてよかったと、つくづく思った。

大学二年の夏、ある一人の男性と知り合った。私は、実家近くで開かれた障害児の訓練キャンプに、お手伝いで参加させてもらった。彼は、そこへA教育大の教授の助手として来ていた。四年生で、決して美男子とは言えないが、さわやかそうで好感のもてる人だった。他にも学生はたくさんいたのだが、運命の出会いとは不思議なものである。たまたま、くじで引いた食事の席が隣どうしだったり、レクリエーションの時、ゲームの相手だったり、話す機会が多かった。そして、多分決定的なものは、彼の家と私の下宿先が近かったという事だろう。

夏休みが終わり、大学にもどってからも、度々会うようになった。彼が、いつ、どんな理由で、こんな私を一人の女性として、そして共に歩いて行く女性として考えてくれたのかはわからない。ただ、人からきらわれる事はあってもめったに人から愛された事のない私は、優しさをつい愛だとかんちがいし、深く

傷ついた事が幾度かあったので、素直に気持ちを受け入れる場所がなかった。

大学生活も残りわずかな、四年生のある寒い冬の日。もう友人の誰もが、就職も決まり残り少ない大学生活をエンジョイしている。こちらからお願ひしなくても、企業の方から頭を下げてくる人もいると言うのに。三十数か所、いろいろな施設や企業の試験を受けたり頭を下げて歩き回ったが、結果はすべて不採用。

「就職、まだ決まってないの」

彼の前で、おもわず、涙といっしょにこぼれてしまった。人前で、私が弱音をはくなんて、まして、涙を流すなんて、どうしちやっただらう。

「永久就職しちやっただらう？」

人が涙まで流して訴えているのに、彼は、冗談なのか、まじめなのか、表情一つ変えずに言った。

「そんな人がいたら、こんな苦労はしないわよ」

と私が、言い終わらないうちに、彼は、黙って自分を指さした。返す言葉もなく、私はしばらく呆然としていた。天にも昇るような熱い熱い燃え上がってくる想いを、必死に押し消そうとした。こんな私と彼が結婚できるわけがない。まして私には、重度の精薄の妹がいる。そんな夢みたいな事、考えてはいけない。

卒業ぎりぎりになって、地元の自閉症児施設へ、やっと就職が決まった。職業安定所の方々の努力や、園長先生のおかげである。四年間住みなれ、数々の思い出がつめ込まれた下宿を引き払い、家にもどり、社会の一員としての一步を歩き出した。今まで自分は苦労して生きていたとか、すごくがんばっているな

どと、うぬぼれた考えを持っていたが、それは、親とか、友人とかという大きな器にささえられていた事を忘れていた。なんと甘い考えだったのだろうか。社会の中で、働いてお金をもらおう、それがどんなに障害者にとって大変な事か、身にしみてわかった。仕事とは、その過程が問題ではない。結果よければすべて良しというものである。どんなに努力してやっても、うまく出来なければ何の意味もないのである。私達障害者は、仕事の内容によっては、人の二倍も三倍も時間がかかる。その上うまく出来ない。しかし、人の四倍、六倍努力し、労力を使っている。結果というものは、悲しい事実である。

日増しにやせていく体、作り笑いも、しだいにつかれていく私を、とても心配してくれた彼は、結婚の話を手で一人で進めていた。しかし、どうしても、私は素直に彼の胸に飛び込める勇気がなかった。確かに、苦しい現実から逃げ出す、一番楽な手段かもしれない。しかし、私は、私を理解し、妹を理解し、家族を理解してくれるような人に、養子に入ってもらい、仕事だつてつらいからと、やめたくない。石にかじりついても続けてやろうと思っていた。母は、私の思いをすべて読んで、「張りつめた心は、いつかブツツと切れてしまうよ、ゴムと同じで。そんな意地ばかり張っていても、いつかは、ダメになって、つかれてしまう。人間みんな誰かにささえられながら生きてるんだからね」と優しく笑った。

大学を卒業して、二年めの夏、私達は、母校である高校の教会で結婚式を挙げた。友人に借りたウェディングドレス、友人が心をこめて作ってくれたオレンジ色のブーケ。シスターが歌う聖歌の中、十字架



の前で、永久の愛を誓った。大きなウェディングケーキも、色とりどりのキャンドルも、何もなければ、みんなのあふれんばかりの暖かい愛に包まれて、本当に幸せだった。

しかし彼の身内は、大反対だった。式の時間だけは両親が顔を見せ、少しのお金を彼に手渡し、さっと帰っていった。シスターは、

「人間を見かけだけで判断する事は、とても悲しい事です。でも、御両親が、ここに来て下さったただけでも感謝しなくてはなりません」

とおっしゃった。確かに、彼の身内の立場になって考えれば、こんな障害のある私とわざわざ結婚する事に反対するのは当然だろう。しかし、彼の両親が帰った後、彼の上司や友人にまで、頭を下げ、遠い所から来て下さった方々には、電車賃を渡していた私の両親。頭が下がる思いだった。反対するのは、本当に簡単に楽な事である。しかし、理解し、援助するという事は、忍耐もいり、相当、寛大な気持ちがないと出来ない。私は改めて、両親のありがたさを知った。

彼の職場近くである、岡崎市内で、公営住宅を借り、新しい生活が始まった。回りは誰一人として知る人もなかったが、しだいに親しい友人もでき、精神的にも肉体的にも落ち着いた。今までの自分が、まるでうそのように、ごつごつとがっていた心の角までが、丸くなったように思えた。

その後すぐに、お腹に子どもが出来た。大きな喜びと期待、その裏に不安の影がうずまいている事は、隠しきれなかった。

「こんな体で、無事に産めるだろうか。私と同じような苦しみを、この子には味わってほしくない」  
そんな思いが大きくなると同時に、時間は流れ、お腹はしだいに大きくなり、子どもは元気に動き出した。

「神様はそんな意地悪じゃないわ。大丈夫よ。落ちついて、元気な子産みましょうね」

分娩台に登った私の手をぎゅっと握り、看護婦さんは励ましてくれた。暖かい目、不安の目、期待の目、いくつかの目に見守られながら、私は元気の良い女の子を産んだ。あまり苦しむ事もなく、安産だった。私は、喜びと興奮で二日間、眠る事ができなかった。主人は、子どもが産まれてから、細い目がよけい細くなり、八時二十分から眉が動かなくなった。何も言わなかったが、一番心配していて、そして、一番ホッとしたのは、彼だったのかもしれないと気付いた。世界に一つしかない名前をつけたいと、お腹に子どもが出来たとわかってから、毎日のように辞書と向かいあっていた。

「真路」真実一路に育つように、と考えに考えぬいた名前である。

真路と私の新たな戦いが始まった。喜びにひたっていられたのもつかの間。その小さな体は、私の不自由な手では、こわしてしまいそうで、恐ろしくて抱く事さえもままならなかった。そして、お乳さえも、思うようにあげる事も出来ず、忙しいはずの看護婦さんが、いやな顔もせず、「がんばってね」と励ましの言葉をくれながら、介助してくれた。他の人達が満足げに、赤ちゃんを抱いている姿を見ると、うらやましいやら情け無いやら、あせる気持ちやらで、心も顔もぐしゃぐしゃになった。でも、人間、やれない事なんて、一つも無いのだ。努力と慣れと頭の使いようで、なんとかなるもの。私の母親業も日、一日と

板について来た。真路のほうもよくしたもので、この不自由な手のふるえが、ちょうどゆりかごのよう  
心地良いのか、私の腕の中が一番安心した顔を見せてくれる。陰で、

「障害者の母親だなんて、子どもがかわいそうだね」

という声もよく聞いたが、そんな時は、本当に母親としての喜びを感じた。確かにこの子が育っていく上  
で、私の事で悩んだり、いやな思いをするであろう。それは、私にとっても耐えがたくつらい事だが、こ  
の子とともに、明るく強くのりきって行こうと決意した。

真路が八か月になった頃から、私は、気分が悪く、体調がすぐれない日が続いた。生理はまだ不順だっ  
たが、すぐにつわりだと感じ病院に行った。やはりその通りだった。

「年子ができてしまう。こんな私にかぎってどうして大変な事ばかりにぶつかるの」  
となげきながらも、

「なんとかなるわよ。真路の時だって、最初はどうなるかと思っただけど、今はなんとかやってるんだか  
ら」

と自分に言い聞かせてお腹をさすった。

一年半ちがいで、私はまた、女の子を産んだ。二人目という事もあって、産むのは楽だったが、育児は  
慣れたもの？と言っても、考えていた以上に大変だった。真実一路だけではいけない。人を愛する美しい  
心を持たなくてはと、主人。次の子は「あいき愛美」

私は、毎日、毎日、真路と愛美の世話に明け暮れ、ちょっぴり妻業は、休業中だった。主人が、子ども

にやきもちをやく時もあったが、それも仕方がない。朝から晩まで洗たく機は回りっぱなし、買物に行けば、前と後ろで、おんぶにだっこ。そして手には買物袋。その姿で、団地の四階の自宅まで、かけ上がった。

「女は弱し、母は強し」まさにそのものだった。

そんな娘達も、もう小学校二年生と三年生。にくまれ口も、数多くたたたくがこんな私を、

「おかあさん、おかあさんが一番大好き」

などと慕ってくれる。私は子どもを持って初めて、親の子どもに対する愛情の深さを知った。そして、小さな命を、一人の心ある人間に育てていく大変さを、しみじみと感じている。

私も三十半ばとなった。本当の幸せに包まれている中で、この頃やっと、障害を背負って産まれてきたのも運命だと思えるようになった。この障害のおかげで、苦しい人達の気持ちもわかる。多くの素敵な人達との出会いもあった。人に感謝する気持ちを持てた。そう思うと、とても気が楽になった。子育てもやっと一段落してきた。また、何か新しい事に挑戦してみようかな、と夢を膨らませている。

栗木 宏美  
昭和三十三年生まれ 主婦  
愛知県岡崎市

選評

実に素直に書かれている。脳性小児麻痺の障害を負いながらこれほどの文章に仕上げたその努力とパワーにまず脱帽したい。障害の中から歯をくいしばりながら生きてきた三十数年の栗木さんの苦闘の人生……そこには大きくて深い両親の愛、夫の愛、子どもたちに対する愛など、人に感謝する気持ちの大切さが痛い程伝わってくる。障害という不幸は背負っていても、困りの人たちに恵まれた幸せ。これからの人生もまた、作品にして欲しい気がする。

(内林達夫)